
白昼夢

香龍

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白昼夢

【Nコード】

N9566A

【作者名】

香龍

【あらすじ】

ごく普通の日常の中で過ごしてきた高校生美月魁斗は退屈で現実味のあるこの世界に充実感を求めている。そんな魁斗の元に一通のメールが届いた。そしてこのメールの内容を巡ってある組織が動き始める…

プロローグ（前書き）

初投稿なので上手く表現出来てませんが大目にみてやって下さい。

プロローグ

俺は夢を見る。

何の夢かは分からない。

それはとても暗くて怖くて寂しい。

でも少し温かくてくすぐったい。

そしてこれが物語の引き金だとは思わない。
いや、思いたくはない。

第一章〜日常〜（前書き）

やはり上手く書けませんが大目にみてやって下さい。そしてアドバイスをお願いします。

第一章　日常

いつもの風景。

いつもの通り道。

いつもの教室。

そしていつもの日常。

（高校生活なんてつまらないな。）

なんて考えてたら肩越しに気配を感じた。振り向くと端正な顔立ちに二つの潤んだ宝石、整った鼻や唇を持ち艶やかな黒髪を後ろで束ねただけの女の姿が目に入った。
俺の幼なじみの神咲美樹である。

「何考え込んでるのよ。全く魁斗らしくないわね。もっと楽しく毎日を過ごせないわけ。」などといきなり高い声で話しかけてきた。

「俺はお前ほど脳天気じゃないからね。」

「あら、私が脳天気ですって？あんたに言われるとは思わなかったわ。」

（全くこの女は毎日来る度に喧嘩を売ってきやがる。最初は買ってやったが今じゃやる気も出やしない。ということで今日軽く流しますか。）

「俺が悪かったよ。だから自分の席に戻ってくれ。頼む。」
と上っ面で謝ると

「そんなに謝らないでよ。私が悪いみたいじゃない」
当たり前だと心で叫んでやった。

「分かった。謝らないから早く自分の席に戻ってくれ。もう授業始まるから。」

そう言う少し寂しそうに自分の席に戻っていた。

無事に学校も終わって俺は帰路についた。

家に帰る途中突然携帯がなりだした。

（あれ？電源切ってたはずだけだな。）

不信に思いながらも携帯を見るとメールが届いているようだった。いつもならさほどメールを気にしないのだがこの時は違った。そのメールに取り付かれたかのように見入っていた。

そしてそのメールに添付ファイルがあるのに気がついた。そのファイルを開いてみた。

そして俺の日常は終わった…

第二章↳歪みと少女↳（前書き）

また懲りずに書いてます。あまり上手く出来てませんがアドバイス
お願いします。

第二章　歪みと少女

「……………ここはドコだろう。俺の日常にはないものばかりが目に入る。見慣れたものはない。いや、あるにはある。でもそれも歪んでいる。いや、歪んで見える。」

メールを確かめた俺はどうなったんだろう？

今わかる事は世界が歪んでいる。いや、歪んでいるのは俺だということぐらいだ。

悩んでも仕方がないので歩くことにした。

この世界を、歪んだ俺の足で……

少し歩くと小屋が見えてきた。薄汚くてこぢんまりとした小屋だ。

俺はそこで少し休むことにした。

外観のわりに中は整っていて住むには不便がないくらいの家具や日用品が揃っていた。

「誰か住んでるのかな。」

などと呟いてみたら後ろに気配を感じた。

（ホントに住んでるのかよ。得体の知れないものだったらどうすりや良いんだよ。意外と死んだふりって利くかもしれないな。ってそんなわけないか。）

なんて考えつつ俺は後ろを振り向く。

そこには空を閉じこめたように蒼い瞳と雪のように淡い白銀の髪を持つネコのような少女が座っていた。そしてこっちを見ている。

（なんでこんなに小さな女の子がここにいるんだ？）

と思った瞬間少女が口を開いた。

「ここ私の家だから。」

「……………えっ？」

俺はこの少女からこの事を聞かされた。

それを要約してみるとこういうことらしい。

この世界の名前は端界といって自分の世界を嫌うもののみが来れる端の世界らしくて俺はその世界に選ばれたということ。そしてこの小屋は最後の決断を行う場所でこの少女が審判員だということ。

にわかには信じがたいことだろう。

しかしこの世界にいるせいか、それとも俺の感覚がおかしいのか……。

いや、そんなことはどうでもいい。

やはりこの世界がおかしいとは考えなかった。

それに退屈な毎日から抜け出せるなら何でも良かったんだ。

そして俺は新たな道に足を踏み入れた。

第三章　結社（前書き）

またまた書いてみました。みなさんアドバイスお願いします。

第三章　結社

僕の名前は美月朔矢。　クロス・ヘブンという結社の一人だ。
この世界には影に隠れて蠢く組織が数多くあってクロス・ヘブンもその一つである。

「まだ捕まらないのか？ 全く一つの目的をクリアするのにいつまでかかるんですか。」

と部下に説教してるのは僕の同期で幹部クラスの宗輔である。

「そう言っなよ。相手は審判の力を持つんだ。並の兵士じゃ太刀打ち出来るわけないだろ。」

と宗輔をなだめているのはこれまた同期にして幹部クラスの司である。一応僕らは十代で幹部クラスになった天才ということでは慕われているのだ。

「ふん、太刀打ち出来ないから違法の力を貸しているんですよ。それにもかかわらず捕まえることはおろか見つけることも出来ないなんて…… 全く腹立たしい……」

「そう言っなよ。相手が強いのは事実なんだから。」

僕は話を振られそうない気がしたので外に出ることにした。

外はいつもと同じ風景だった。何もなくて悲しい音だけが響く殺伐とした風景。でも僕はこの風景が好きだ。なんだか懐かしい感じがする。

（そろそろ終わったかな。いや、まだ終わってないかもな。）
などと考えながら僕は室内に戻る事にした。

僕は戻る途中さび付いた小さな箱を見つけた。

（ここにこんなのがあったかな。…それとも誰かの忘れ物か…）
僕は考えつつ小さな箱に触ってみた。

それは見た目通りに硬く冷たい氷のようだった。

（ここにある以上これはあいつの所有物になる。面倒だが知らせなければならぬな。）

僕は嫌々ながらも極視の力を持つ宗輔にこれを渡すことにした。

ガチャツ。

「んっ、あなたが私の部屋に来るなんて珍しいですね。天変地異でも起きるんじゃないですか。」

「ふん、勝手に言ってる。視てもらいたいものがあるから来たんだよ。」

僕は言いながらさび付いた小さな箱を渡した。

「ん、何ですかこれ？」

「分からないからここに来たんだ。早く調べてくれ。」

「仕方ないですね。それを貸してください。」

「ああ。」

そして僕らは歪みを知ることになった。

第四章　女

「……い。……しい。苦しい。俺は……どう……なったんだ……。
うつ。気持ち……悪い……。」

「……て。……起きて。」

声が聞こえる。

俺を引き戻す。

優しい……声に……俺は目を……覚ます。

「……俺は何をしてたんだ。……俺は端界にいたんじゃないのか。」
「……どうしたの？」

「んっ？この声は……美樹か。」

俺は声のする方に首を傾けた。

そこにはいつもの幼なじみがいた。

「お前……何してんだ？」

「私が聞きたいぐらいよ。あんたここで倒れてたのよ。」

（……倒れてた？いや、そんなはずない。俺は端界にいたはず。そしてこの世界と決別したはず。……どうして、コイツがいるんだ。そう考えている俺の頭部に痛みが走った。）

「痛っ！」

俺はな奇声を発しながら上を見上げた。

いつもの幼なじみは見慣れぬ物を持っている。

それは端界にいたときに見た歪みだった。

「何でお前がそんな物持つてるんだ。そしてなぜ俺を殴った？」

「知らないわよ。それにいつの間にか変な場所に迷ってたんだもの。ホントに困ったわ。殴ったのは何となくよ。」

幼なじみは言いながら周りを見回していた。

そう言われて俺は異変に気が付いた。
周りは全て歪んでいる。いや、歪んで見える。

俺は隣にいる幼なじみに聞いてみた。

「お前、それどんな風に見える？」

「どんな風って言われても……分からないわ。」「例えば歪んでるとか、透けているとか。」

「そうね。強いて言うならば少し歪んでるわ。」

（やっぱり……。

それじゃここは端界なんだ。そしてコイツも選ばれたってわけだ。）

俺は考えた後幼なじみに話しかけた。

「なあ。これからどうしたらいいんだ。」

「さあ。私を知るわけないでしょ。」

「それもそうか。……少し歩いてみるか。」

「そうね。ここにいても仕方ないしね。」こうして俺たちは少し歩くことになった。

そしてやっぱりあの小屋を見つけた。

「なあ。この小屋どう見えるよ？」

「少し汚れてるわね。」

「そうだな。これ見るの二回目だけどやっぱり汚れてるな。」

「んっ？……二回目って言った？」

「うん。ちよつと前に見たからな。」

「それじゃこここの事知ってるの？」

「ああ。ここは端界っていう世界で歪んだ世界って感じた。そしてこの小屋は最後の決断をするためにあるということ。」

俺はわかる範囲でここのことを教えてやった。

「ふーん。つまり私たちは特別扱いなのね。」

「……お前、俺の話を聞いてたか？」

「聞いてたわよ。」

「それじゃお前がバカなんだな。」

俺は言いながら幼なじみの頭を小突いた。

「いたつ。いきなり何するのよ。頭悪くなったらどうしてくれるのよ。」

このバカ魁斗。ちょっと、聞いているの？」

文句を連発している幼なじみを抱えて俺は飛び退いた。

『ザクッ』

刺音とともに俺たちがいた場所に穴が開いていた。

俺は少しビビリながら上を見た。巨大な刀を装備した人間……いや、人間じゃないかもしれない。そんな気持ち悪い歪みが俺達を睨みながら立っている。

「ちょっと、何なのよこの化け物は？」

幼なじみは恐怖に声を震わせ、俺は化け物の姿に見入っていた。

『ドスッ』

化け物の背後で鈍い音。同時に化け物の躰は空に霧散した。霧の向こうには歪みを持った女が立っている。

「あなた達、邪魔よ。どきなさい。」

その女は表情の無い冷たい声でそう言った。

それに反応したのは俺ではなく幼なじみだった。

「あなた……何者なの？あんな化け物を一撃で倒しちゃうなんて……普通じゃないわ。」

幼なじみは恐れを持って聞いた。だした。

しかし女はその質問には答えずこちらに歩いてくる。

少しずつだが確実に歩を進めてくる。

そして目の前で止まった。

幼なじみと俺は静かに女を見つめていた。

しばしの沈黙。

「あなた達どうしてここに来たの？」

沈黙を破ったのは女の表情の無い冷たい声だった。

「そ、そんなの知らないわよ。」

「そう。それじゃあなたは知ってる？」

幼なじみの答えに満足出来ない女は俺に聞いた。だした。

「俺は……俺は……自ら望んでこの端界に来た……誰の指図も受けない！」

俺は叫んだ。

「……そうね。分かったわ。それに私にあなたを止める権利もないしね。せいぜい死なないように気を付けなさいよ。」

女は去っていった。

これから起こる全ての現象を知ってるかのようなセリフを口走って

……

第五章　　始動

　　死天宮・東の空間

「何か分かった事は？」

複雑怪奇な機械と対峙している宗輔に問う。

「そうですね。この箱を構成する物質がこの世界に存在しないという事。そして異様なエネルギーを発しているという事。今分かるのはこれぐらいですね」

言いながら宗輔は眼鏡を外している。

「十分だ。後は司に任せれば良いだろう」

「また司を使うんですか。あなたは自分で動こうと思わないんですか」

「僕の力は戦闘用だから搜索には向かない。だが司の力は搜索に向いている。そう考えれば妥当だろう。」

僕は宗輔に説明して部屋を出ていった。

　　回廊

「朔夜様。お忙しい所申し訳ありません」

そう言っ僕僕の目の前にエメラルドグリーンの瞳に絹糸のような黒髪を持つ少女が現れた。

少女のとなりでは兵士が敬礼している。

その光景は奇妙なのに違和感がなかった。

「梨音か。何か変わったことでもあったか」

「冬嘉様が獲物の位置を捉えたそうです」
梨音が口に出した冬嘉とは僕の師でもあり禁忌を犯した犯罪者でもある。

「梨音。すぐに特殊師団を集めれるか？」

「一時間程度で招集できますが……」

「かまわない。それじゃ頼むぞ」

「わかりました」

そう言つて彼女は兵士と共に去つていった。

（研究棟）

「すまないが、仕事を頼まれてくれないか？」
僕は司に訊いた。

「急ぎの仕事か？」

「ああ、早めに終わらせてくれると助かる」

「そうか。それじゃ仕事内容を教えてくれ」

「ああ。こいつの構成物質に一致する鉱石を探してもらいたい」
僕は言いながら箱を投げ渡した。

「これは……姫翠石か」

「知ってるのか」

「俺の旧友に錬金術師がいてね。そいつがよく使っていたよ」

「そんなことはどうでもいい。どこで手にはいるんだ？」

「そうだな……………あくまで予測だが端界にあるかもしれないな」

「端界だな。仕事の邪魔をして悪かったな」

「死天宮・天の園」

「朔夜様。特殊師団の招集完了しました」

「すまないな」

「私はあなたの為にいるのです。礼など必要ありません。それと堅苦しいしゃべり方もやめてください」

「そうだったな」

僕は微笑んで彼女を見つめた。

「……………？あ、あの……………」

彼女は僕の瞳に気づいたようだ。

「どうした？」

「いえ、こちらを見ていたので……………」

「気づいたか」

「……分かりますよ」

「……何で見てたか知りたいだろ」

「いえ、結構です」

「……そうか。それじゃ次の仕事を頼まれてはくれるか？」
僕は彼女に訊いた。

「私はあなたの為にいるのです。どんな仕事も引き受けます」

「それじゃ特殊師団と共に端界に行ってくれ」

「わかりました。それでは失礼します。」

そう言って彼女は出ていこうとした。

「待て」

僕は去ろうとする梨音を呼び止める。

「何でしょう」

「………気をつけろよ。………お前が帰るのを待ってるからな」

「えっ、私をですか？」

「ああ。必ず僕の元に戻ってこいよ」

「………はい。それでは行ってきます」

彼女は色付く頬を見られないように足早に去っていった。

「愛してるよ……梨音」

彼女が部屋を出た後僕は小さく呟いた。

第六章　小屋（前書き）

表現があまり上手じゃないですが多めに見てやってください。

第六章　小屋

「端界」

『ガチャン』

ドアは軽く引いただけ開いた。

「おじゃまします」

幼なじみは丁寧にお辞儀をして入っていく。

「……違う」

俺は周りを見回して小さく呟いた。

床には理科の実験で使うような器具が乱雑においてある。

天井には蜘蛛の巣が張り巡らされていて、いたるところに血痕があった。

ここまでなら普通の廃墟と変わらない。

しかし廃墟には決してあつてはならないものがそこにはあった。

「ちょっと。早くきてよ。一人にしないで」

幼なじみの高い声が聞こえてくる。

俺はそこにある不気味な生物を横目に幼なじみを追いかけることにした。

幼なじみに追いついた時には息が切れていた。

「はあ、はあ、はあ……お前……ある……くの……はや……すぢ……」

「そんなことないよ。もゝ男のくせにだらしないなゝ」

「はあ、はあ、知ってるだろ。俺の病気の事」

「知ってるよ」

「……だからもう少しゆっくり歩いてくれないか？」

呼吸を整えながら幼なじみに頼んだ。

「仕方ないなゝ」

「悪い。助かる」

俺は感謝の気持ちを含めて幼なじみに微笑んだ。

「私よりあんたの方がここをよくしってるから。ただそれだけだよ」

そう言う幼なじみは歩く速さを落としてくれた。

何時間歩いただろうか。外観は小屋なのに中は宮殿を思わせるよう

な広さを持っていた。

まるでこの世界の歪みのように……

「かゝいゝと。ここどうなってるのよ。いくら進んでも廊下しかないじゃないの」

そう言う幼なじみが座りこんだので俺も立ち止まることにした。

「俺が知るわけないだろ」

「えゝ、何でも知ってるんじゃないの？」

「俺は神さまなんかじゃねえよ」

「そんなこと分かってるわよ」

「それじゃ俺に訊くな」

「じゃあどうしたらいいのよ。ずっと廊下だし、部屋はないし……
…もう大キツライ！」

「……………もう少し静かにしてくれ。お前の声は響くんだよ」

「だってゝ。もしかしたらここで死ぬかもしれないのよ」

「っだー！うるさいんだよ。サッサと歩け」

「ぶゝゝゝ。わかったわよ。歩けばいいんでしょ」

いやいやながらも幼なじみは歩き出した。

それを追うようにして俺も歩き出す。

歩き始めて一時間くらい経っただろうか。俺たちの目の前に扉が現れた。

俺たちはその扉を開けて中に入ることにした

「やっと廊下から抜け出せたね……………」

「さすがに疲れたな」

「ホント…………もう動きたくな〜い〜」

「…………少し休むか？」

俺は幼なじみに訊いた。

「…………魁斗？」

「何だよ」

「もしかして自分が休みたいんじゃないの？」

「いや、そんなことねえよ！」

「あ〜〜今目が泳いだよ」

「…………仕方ないだろ。俺病気持ちなんだから」

「やっぱり。でも私も疲れたから休むのさんせーい」

「悪いな」

「そんなのいいよ。それよりお腹空かない？」

「そついやこつち来てから何も食ってないもんな」

「でしょ」

「でも何もないだろ」

「かゝいゝとゝ！あんた周りを見なさいよ」

幼なじみの言葉を聞いて周りを見回した。床には机と椅子、壁は絵画で埋め尽くされて、天井には豆電球が吊らされているだけ。

「別に何も無いぞ」

「魁斗。ちゃんと机の上見たの？」

「机？」

俺は目を凝らして机の上をしてみる。

「食事が置いてあるな」

「そつよ。それ食べちゃおうよ」

「えっ、マジで！」

「うん、マジよ!」

「…………悪い。俺はパス」

「えゝ。何でよ」

「そんな不気味な物食えるか」

「もしかしたら美味しいかもしれないじゃない」

「どこからその根拠がでてくるんだ」

「勘よ。女の勘って鋭いって言うじゃない」

「お前の勘は当てにならない」

「どうしてよ」

「どうしてでもだよ」

そんな言い争いが一時間程度続いただろうか。
疲れてその場に座りこむ俺たちの前に不気味なモノが立ちはだかった。

そいつは紅い双眸に裂けた唇を持ちそれをマントで覆い隠すような風貌をしている。

でも決して敵意があるようにはみえなかった。

「ねえ、これ何かな？」

「さあ、何だろうな」

「お化けかな？」

「いや、違うだろ」

「そうかな？」

「当たり前だろ」

俺たちはそのモノの正体を話し合いながらモノに近づいていく。少しづつ、ゆっくりと。

息苦しくなってくる。

モノから感じる生への執念。

モノに存在意義を喰われそうな感覚。

「かゝいゝと。起きてよ」

幼なじみの声で闇から抜け出す。

「……………んっ。美樹か」

眩しさに目を細める。

（眩しい？ここに灯りは灯ってなかったはず）

細めた目を一気に開く。

幼なじみの声がまた聞こえてくる。

「ねえ、大丈夫？」

「ああ」

「よかった！死んじやったかと思ったよ」

幼なじみは目に涙を貯めて俺の胸を叩いている。

「おい、泣くなよ。……………いや、だから、泣くなって」
俺は泣つてのに弱いらしく俺は戸惑ってしまった。

「もっびつくりしたよ。魁斗いきなり倒れちゃうんだもん」

「悪い。………ってそれホントか？」

「覚えてないの」

「ああ、全くな。………ところでここは？」
俺は周りを見回す。

下には生活用品が小綺麗に並べられて上には下と不釣り合いな
シャンデリア。
横には時計がいくつか掛けられている。

「この人に連れてきてもらったの」

「どうも」

そこにはさっきのモノがいて俺はそいつをずっと見つめていた。こ
いつを昔から知ってたかのように………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9566a/>

白昼夢

2010年10月17日10時45分発行